
全国学力・学習状況調査を活用した学力向上の取組

～城田中スタンダードの構築とその効果の検証～

伊勢市立城田中学校
校長 鈴木 憲

1 主題設定の理由

本校は、宮川の左岸に位置し、校区は水田を中心とした農村地区にある。近年、他地域からの転居者も増え、県道を中心に郊外型のチェーン店が進出してきている。地域には、古くからの良き伝統や慣習を大切にしている。地域には、古くからの良き伝統や慣習を大切にしている。地域には、古くからの良き伝統や慣習を大切にしている。

生徒数は164名で、比較的小さな規模の学校である。生徒は全体的におとなしく素直で、与えられた自分の責任をしっかりと果たすことができる。また、校区内には小学校が1校しかなく、義務教育9年間を同じ仲間と過ごす中で、生徒たちは、学年を超えて仲が良く、安心して学校生活を送ることができている。

その一方で、学習集団が固定化しがちで、生徒同士の切磋琢磨が難しくなり、多様な見方や考え方が出にくい、異なる集団との交流機会が少なく、社会性やコミュニケーション力が育ちにくいなどの課題もある。

平成26年度全国学力・学習状況調査では、国語、数学の全ての調査内容で、全国の平均正答率を下回る状況にあった。とりわけ、主として活用に関する問題（B問題）で全国との差が大きく、課題が見られた。また、同調査において、数学の学習への関心・意欲、家庭学習の時間数、予習・復習の習慣、早寝・早起きの習慣、テレビやビデオの視聴時間数、テレビゲームやインターネットの利用時間数などの質問項目で、改善の必要な結果が示され、学習意欲や学習習慣、生活習慣に課題があることが明らかとなった。

そこで、生徒たちに確かな学力を育成するための取組を実施するとともに、その効果を検証する実践的研究を行うこととした。

2 研究のねらい

生徒たちに、学力の重要な3つの要素である①基礎的な知識・技能、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③学習意欲を育成するため、全国学力・学習状況調査（以下、

全国学調という）を活用した取組を実施するとともにその効果を検証し、学力向上のための「城田中スタンダード」を構築することを研究のねらいとした。

3 研究の方法

「授業改善支援プラン2011」（三重県教育委員会）に示されている学力向上に向けた下記の4つの視点を踏まえ、具体的な教育指導の改善方を検討し、学校全体で実施する。

- ①確かな学力を身につける授業の改善
 - ・「ともに学び高め合う学習集団」の構築
 - ・「わかる授業」の創造
- ②指導力を高める研修の推進
 - ・充実した研修の推進
- ③組織的に取り組む学校体制の確立
 - ・学力の向上に向けた検証改善サイクルの確立
 - ・統一した取組
- ④家庭・地域との連携の強化
 - ・学習支援 ・情報共有
 - ・学校運営への参画 ・学習環境の整備

実施期間は、平成26年4月～平成29年3月までの3年間とする。

上記4つの視点を踏まえた教育指導の改善方策については、各年度の全国学調の結果からその効果を検証し、改善を図りながら取組を進める。

取組の効果は、全国学調の「教科に関する調査」結果及び「生徒質問紙調査」結果で検証する。

4 研究の実践

実施期間における主な教育指導の改善方策と具体の実践は、次のとおりである。

（1）授業スタイルの統一

生徒たちが学ぶ喜び、わかる楽しさを実感することができる授業づくりのため、「導入、展開、終末」の基本的な授業スタイルの統一を図っている。

導入での「めあての提示」と終末での「振り返り活

動」の徹底を図るため、「めあて」「ふりかえり」「まとめ」のマグネットカードを全ての普通教室、特別教室の黒板に貼り、学校全体での活用を促進している。

授業の展開では、各教科の特性に合わせて、コンピュータやプロジェクタ、電子黒板、デジタル教科書の活用、ワークシートや小テストの実施など、生徒の学習意欲を高める教材の工夫が日常的に行われている。

(2) 校長による日常的な授業参観

校長による授業参観を日常的に実施し、生徒の学習活動や教員の指導の良い点を伝えている。また、参観の際は、授業の様子をデジタルカメラで撮影し、教員への助言に活用している。さらに、生徒が意欲的に活動する特色ある授業については、学校のホームページに掲載し、生徒や保護者に伝えている。

(3) 家庭学習の習慣化の取組

家庭での学習習慣、生活習慣の確立のため、「学習計画表」の統一様式を学校独自に作成し、全学年で活用している。年間6回の定期テストに加えて、実力テスト、春・夏・冬の長期休業期間などにも実施し、担任がきめ細かく取組状況を確認し、コメントを記入している。保護者のコメント欄には、毎回全ての家庭からの記入がある。また、良い計画や実践、生徒の反省、保護者のコメントなどは、各担任が「学級通信」で紹介するなどして取組の活性化と充実を図っている。

(4) 家庭学習の内容の充実

各教科で毎日一定量の家庭学習用の課題（宿題）を与えるようにしている。教員は、提出された宿題をチェックし、生徒たち個々の課題を把握して指導に生かしている。宿題の内容についても、教員間で意思統一を図り、基礎的・基本的な内容に加えて、目的に応じて文章の内容をまとめたり、理由を明確にして説明したりする知識を活用する内容を与えるようにしている。また、三重県教育委員会作成のワークシート集「三重の学Viva!!(まなびば)セット」の活用を進めている。

(5) 全国学調の問題の活用

全国学調の問題を、各学年の授業の教材として年間を通じて計画的に活用している。学校では、生徒の学力の定着状況、指導の成果や課題を確認し、授業改善につなげることができている。生徒たちは、学習内容の習得状況を把握し、それ以降の学習に生かすことができている。また、3年生での問題の再実施で、生徒たちは4月に解けなかった問題が解けるようになったことを実感し、達成感を持つことができている。

(6) 全国学調、みえスタディチェックの分析等

全国学調、みえスタディチェックの実施後、校内研修会で全教員による自校採点を行っている。また、両調査の県全体の結果を踏まえた分析も全教員で行っている。採点での誤答類型の分類、県全体と比較した問題別の結果分析を教員間で協議する中で、学校の強みや弱み、指導の成果や課題について共通理解し、各教科、各学年の授業改善につなげている。

(7) 全国学調、みえスタディチェックの結果公表

学校と家庭が連携した学力向上の取組を進めるため、全国学調、みえスタディチェック等の調査結果、分析結果を、「学校便り」やホームページ等で数値も含めて公表し、家庭での学習習慣、生活習慣、読書習慣の確立に向けた取組を推進している。

(8) 少人数指導の実施

生徒たちのつまづきに対応したきめ細かい指導の充実を図るため、1・2年生の数学はクラスを2グループに分けた指導、3年生の数学と1年生の英語はティーム・ティーチングによる指導を行っている。また、指導内容に応じてペア学習やグループ学習も取り入れている。思考力や表現力を育成する言語活動、ノート指導や振り返り活動の充実とともに、生徒たちが相互に学び合う学習活動の充実を図ることができている。

(9) 休み時間、放課後、長期休業期間の学習支援

生徒たちは、授業の始まりのチャイムが鳴る前に席に着いて学習の準備をしておき、教員もチャイム前に教室に入る。そのため、教員は、休み時間に教室や廊下に居ることが多く、生徒からの質問に答えたり、国語や英語の暗唱テストの再チャレンジを受けたりするなどの学習支援を日常的に行っている。放課後も、授業中の課題が不合格の生徒や宿題が未提出の生徒への学習補助を行っている。また、長期休業期間には希望者を対象とした補習を実施している。(夏季休業期間は4日間の補習を実施。1講座50分で、1日4講座。)

(10) QUの活用等による学級経営の改善

生徒たちが学校で安心して生活し、規律を守って意欲的に学習できるようにするため、日常的に把握している生徒の学習・生活の状況に加えて、QUを年間2回実施し、学級経営の改善に生かしている。また、生徒の状況を日常的に教職員間で共有するとともに、保護者との連携を密にしてスピード感を重視した生徒指導と教育支援を行っている。さらに、担任やSCによる定期的な教育相談やカウンセリングも行っている。

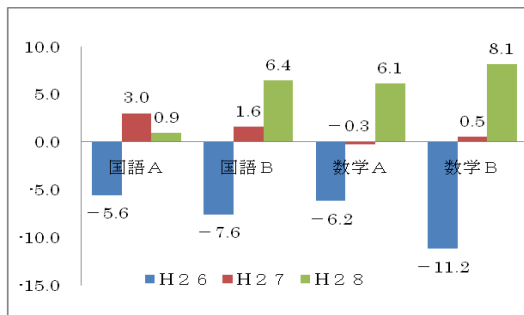
5 研究の成果と今後の課題

3年間の研究実施期間のうち、平成26・27年度2年間の取組の効果について、平成26・27・28年度の全国学調の結果を比較するなどの分析を行い、検証した。

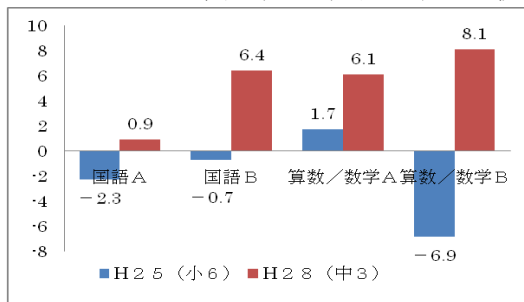
「教科に関する調査」結果では、表1のとおり、国語B、数学A・Bで全国の平均正答率との差が年度ごとに改善され、平成28年度では全国平均を大きく上回った。国語Aについても平成27・28年度は全国平均を上回っている。また、表2のとおり、平成28年度の結果を平成25年度の小学6年の時の結果と比較すると、全国平均との差において全ての教科で改善が見られる。

このようなことから、現在中学3年の生徒が中学1年の年度（平成26年度）から継続的に取り組んでいる教育指導の改善方策に基づく実践は、生徒たちの学力向上に効果があったといえる。

【表1】 平均正答率の全国との差の変容



【表2】 H28(中3)結果とH25(小6)結果との比較
※全国の平均正答率との差で比較



「生徒質問紙調査」では、平成26年度の結果から、数学の学習への関心・意欲、家庭学習の時間数、予習・復習の習慣、早寝・早起きの習慣、テレビやビデオの視聴時間数、テレビゲームやインターネットの利用時間数など、学習意欲や学習習慣、生活習慣に関する質問項目で改善が必要な結果が示された。

これらの質問項目への肯定的な回答(「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」)の割合等について、過去3回の調査結果を比較すると、次のようになる。

【主な「生徒質問紙調査」結果の経年比較】

※数値は左から平成26・27・28年度の割合。

◆学習に対する関心・意欲

①数学の勉強は大切：65.3/81.4/90.4

②数学の授業内容はよく分かる：63.3/67.8/76.9

◆学習習慣

③家で1日当たり2時間以上勉強する

・平日：22.4/27.2/38.4

・土日：30.6/27.2/46.2

④家で授業の予習をしている：24.5/44.0/23.1

⑤家で授業の復習をしている：36.8/47.5/61.5

◆基本的生活習慣

⑥毎日同じ位の時刻に寝る：71.4/72.9/86.5

⑦毎日同じ位の時刻に起きる：93.9/94.9/98.1

⑧平日、1日当たり1時間以上、次のことを行う

・TVやビデオ・DVDの視聴：91.8/94.9/80.7

・テレビゲーム：73.5/74.4/65.4

・携帯やスマホでの通話・メール・ネット:59.2/57.6/48.0

◆指導方法に応じた学習状況

⑨授業で目標が示されていた：59.1/56.0/90.4

⑩振り返る活動をよく行った：40.8/52.5/77.0

◆自尊意識

⑪失敗を恐れず挑戦している：67.3/81.3/84.6

⑫自分には良いところがある：71.4/72.9/86.5

◆規範意識

⑬人の役に立つ人間になりたい：93.9/93.2/100

「生徒質問紙調査」結果の3年間の経年比較では、学習に対する関心・意欲、学習習慣、基本的生活習慣、指導方法に応じた学習状況、自尊意識、規範意識について、「④家庭での予習の習慣」以外の上記全ての質問事項で改善の傾向が見られる。したがって、本校の教育指導の改善方策に基づく実践は、学力の基盤となる力の育成にも効果的に作用していることがわかる。

本実践的研究を通して、学力向上に向けた一定の効果が確認できたことから、3年間の取組期間に実施した教育指導の改善方策を「城田中スタンダードvol. 1」として今後も継続的に取り組んでいく。一方では、学年による大きな差異のない安定的な学力の保障、学力の二極化への対応、教職員の異動に影響されない取組の継続性などの課題もあることから、常に新たな視点を取り入れた見直し・改善を図りながら、学力向上のための「城田中スタンダード」の構築と実践を進める。

